

小学校におけるアクティブラーニングの一考察

－ 総合的な学習の時間：主体性・協同性 －

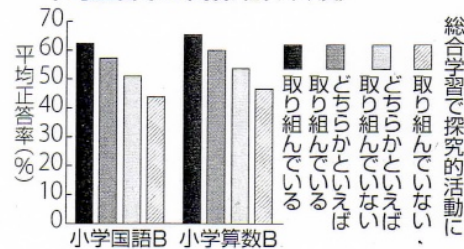
興梠大輔(宮崎県小学校総合的な学習の時間部会 研究部長)

キーワード：協同的な学び、ガイド学習、思考ツール

1 はじめに

次期学習指導要領改訂に伴い、新たなキャッチフレーズとして「アクティブラーニング」がある。「アクティブラーニング」は、大学改革のキーワードとして、昨今、話題となった言葉であり、今後の学習者の姿である。学習者に情報を教え込むだけではなく、情報について思考させ、知識として定着させていく。さらに、その知識を積極的に活用し探究できる学習計画を仕組んでいく。前者は、教科学習を中心に、後者は、総合的な学習の時間を中心に、実践研究が全国各地で行われている。後者の総合的な学習の時間と学力調査との相関についても、クローズアップされている。

総合学習と全国学力テストの平均正答率の関係(2014年度)



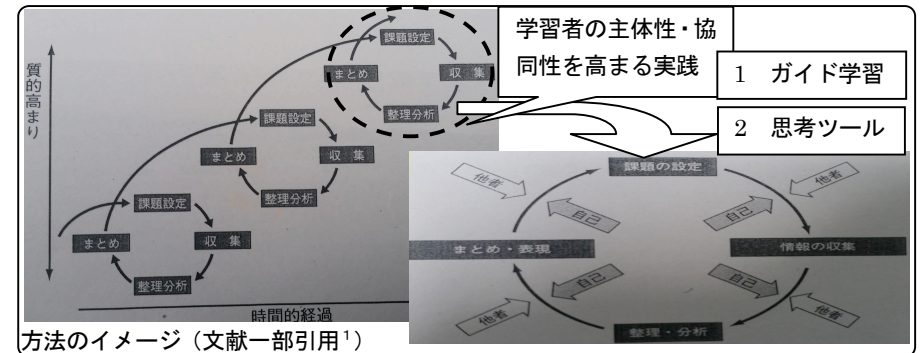
特に、総合的な学習の時間で探究的な学習に取り組んでいる場合とそうではない場合では、活用力を問う小学校の問題でポイント差があった(右図 H26 12/18 読売新聞)という。文部科学省田村視学官(当時、調査官)は、同紙にて、「活用する力などは探究的に学ぶ総合でこそ育てることができる。学校によって学びの質に差があり、いかに探究的な学習をしていくかが今後の課題だ」と述べている。また、同紙にて、「次代が求める能力育む」として、鳴門教育大学村川教授は、下村文部科学相が重要な資質・能力として中央教育審議会に示した「何事にも主体的に取り組もうとする意欲や多様性を尊重する態度、他者と協働するためのリーダーシップやチームワーク、コミュニケーション力」を取り上げ、「子供たちが人や生き物を大切に思い、地域の様々な問題を取り上げ、多様な人々と関わり合いながら協同的に問題解決を図るよう、各学校で工夫を凝らすことが重要である」と述べている。

そこで、宮崎県小学校総合的な学習の時間部会では、平成 31 年度九州大会宮崎大会に向けて、県全体「1 ミリの前進実践」を到達目標に、総合的な学習の時間の全体計画、身に付けさせる力、単元計画についての整備、協同的な学びの姿、思考ツールの選択・活用など、子どもが主体となって、仲間と協同して、国際標準の学力の育成、現代社会

の課題を学ぶこと、自己の生き方を考えることの3つを総合的な学習の時間の教育課程上の必要性や重要性として「アクティブラーニング」について研究を進める。

2 方法

本研究では、ガイド学習(学習の見通し)と思考ツール(情報の可視化)を実践例として、学習者の主体性・協同性を高めるアクティブラーニングの一考察を模索する。



3 結果・考察



左図は、ガイド学習(複式指導方法)である。学習者が役割をもって、学習をリードしていく。学習者が見通しをもたせることができること、学習者同士が協同的に関わり合いで学習を深めることができることが特徴である。

左図は、思考ツールである。情報を可視化することで、学習者が主体的に学習参加できる環境づくりができる。また、情報の可視化によって、学習者が協同して話し合い、課題に対する全体として、合意形成によって、で考え方や見方を見いだすことができる。

4 まとめ

課題設定次第で学習意欲の向上・持続を促すことはできる。また、学習意欲の醸成が図られることで、一人では解決できなければ、仲間の意見や考えを聞き入れ、協同的に学んでいく。しかし、いつも、ベストな状態で学び進むとは限らない。

そこで、主体的に協同的に学習を進めるアクティブラーニングスタイルとして、宮崎県教育の良さと課題を踏まえて、実践研究をおこなった。本研究が、子供たちの学びの充実、子供の笑顔、その子供の将来の笑顔につながっていくことを願っている。

引用・参考文献

- 1 田村学ほか リニューアル総合的な学習の時間 北大路書房 2009
- 2 平成 25 年度 総合的な学習の時間九州大会宮崎大会誌